

「新刊紹介 11月号！！」



「後宮の鳥 6」 白川 紺子



寿雪の銀髪が、衆目にさらされた。その銀髪こそが、前王朝の血を引く証だった。高峻が策を持って隠してきた寿雪の秘密が知られてしまったのだ。しかも寿雪の魂は何処かへと去り、その肉体に宿っているのは“鳥”。

「さよならも言えないうちに」 川口俊和



「最後」があるとわかっていたのに、なぜそれがあの日だと思えなかったんだろう。「君のおかげで僕が幸せだったことを、君に知っててほしかった。」家族に、愛犬に、恋人に会うために過去に戻れる不思議な喫茶店フニクリフニクラを訪れた4人の男女の物語。

「100万回生きたきみ」 七月 隆文



100万回生きたきみと、2500年の流転を繰り返した僕の、奇跡の物語「実は100万回生きているの」そう告白したきみ。だけど、黙っていてごめん。僕はきみより1回多く生きているんだー。ミリオンセラー『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』の著者が紡ぐ、真実の愛

「ガラスの海を渡る舟」 寺地はるな



脆くて、同じものは一つもない。人生はまるで、ガラスみたいだ。みんなと同じ行動がとれず、他人から疎まれてしまいがちな兄の道。落ちこぼれでも優等生でもなく、何でも平均的にこなせるけど、「特別ななにか」が見つからない妹の羽衣子。大阪・空堀商店街にあるガラス工房で兄弟がすごした、愛おしい10年間を書く感動の物語。

「オーラの発表会」 綿矢 りさ



「人を好きになる気持ちがわからないんです」海松子（みるこ）、大学一年生。他人に興味を抱いたり、気持ちを推しはかたりするのが苦手。趣味は凧揚げ。特技はまわりの人に脳内で（ちょっと失礼な）あだ名をつけること。友達に「まね師」の萌音（もね）、ひとりだけ。なのに、幼馴染の同い年男子と、男前の社会人から、気づけばアプローチを受けていて…。

「フェミニズムはもういない、と彼女は言うけれどポストフェミニズムと『女らしさ』のゆくえ」 高橋 幸



「もうフェミニにズムに頼らなくて も、女性だって活躍できる」「女性差別がなくなった現代において、フェミニズムの時代は終わった」と彼女は言った。では、私やあなたの心のどこかに張り付いている「女であること」の不安は、いったいどこからくるのだろうか。